様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19720125
研究課題名（和文）　日本語多義構文の効果的学習順序とその教材開発に関する認知言語学的研究
研究課題名（英文）　A Cognitive Study on the Effective Process of Learning Polysemous Constructions and Textbook Development

研究代表者
尾谷　昌則（ MASANORI ODANI ）
東北学院大学・教養学部言語文化学科・准教授
研究者番号：10382657

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：日本語教育、構文、機能語

１．研究計画の概要

本研究の目的は、日本語の多義的な構文や機能語を対象に、以下の４点を実施することである。①多義構文の使用実態を分析するためのデータ集め（＝コーパス構築）、②各構文の用法研究と使用実態調査、③多義構文の効果的な学習順序の考案、④その成果を反映した教材を開発する。

２．研究の進捗状況

４年計画のうち、３年が終了した。否定の副詞「全然」や、逆接の接続詞「けど」を含む構文について、その意味・用法実態を詳細に分析した。現在は順接の接続詞「だから」「なので」についての調査・分析を進めているところである。使用実態を調査するためのデータ集め（コーパス構築）を同時並行で行っているため、１年で１つの構文を分析するといいうペースになっている。

３．現在までの達成度

本研究の内容を、１.で述べた４つのプロセスに細分化するならば、現在は②の仕上げを行っている段階であり、2010 年度中には③へ移行する予定である。数値で表現するなら 50%といったところである。

４．今後の研究の推進方策

現在は順接接続詞「だから／なので」の用法分析と使用実態調査を行っている。これが終了次第、プロトタイプ理論(Lakoff1987, Taylor1989）と動的用法基盤モデル（Langacker1999）の観点から、各構文の効果的な学習順序についての仮説を立てる。その後で完成品の教材を開発するまでの時間的余裕は無いかもしれないが、せめてワークブックか副教材のようなものを作成したい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

尾谷昌則、「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」、児玉一宏・小山哲治（編）『言葉と認知のメカニズム　―山梨正明教授還暦記念論文集―』、2008 年、pp.103-115.　東京：ひつじ書房

尾谷昌則、「構文の確立と語用論的強化：「全然～ない」の例を中心に」、『日本語用論学会第 9 回大会発表論文集』、2007 年、pp.17-24.

〔学会発表〕（計１件）

尾谷昌則、「装定用法における並置形容詞に関する一考察」、第 62 回東北英文学会、2007 年 11 月 17-18 日、山形大学（山形県）